

# 平成24年度病害虫防除技術情報第5号

平成24年8月1日  
大分県農林水産研究指導センター  
農業研究部

## イチゴ育苗期における炭疽病の防除対策について

梅雨時期の多雨条件において、雨よけ施設を設置していない育苗圃では、病原菌の飛散により炭疽病の拡大が懸念されています。また、今後高温となり、発病しやすい時期が続きますので、予防散布を行うとともに圃場での発生に注意しましょう。

### 1. 発生状況および要因

- (1) 7月中下旬の発生予察巡回調査では、発生面積は平年に比べやや多く、発生量は平年並であった。
- (2) 各振興局等からの情報では、本病の発生が既に確認されている。
- (3) 本病は高温多湿条件下で発病が助長されるが、平成24年7月27日に福岡管区气象台が発表した「九州北部地方1か月予報」によれば、気温は平年並または高い確率ともに40%で、本病の発病に好適な条件が続くことが予想されている。

### 2. 防除対策

- (1) 苗をよく観察し、本病に特徴的な葉や葉柄の病斑の早期発見に努め、発病株は、周辺の株も含めて、圃場外に埋設するなどして処分する。
- (2) 水はねで伝染するため、育苗期は雨よけ栽培と全面マルチに努める。
- (3) 頭上灌水やスプリンクラーは避け、灌水チューブを裏面にして直接葉に水がかからないように注意する。手灌水の場合は、水压を低くして、病原菌が飛散しないようにする。
- (4) 台風や集中豪雨などの前後には、薬剤防除を徹底する。
- (5) 窒素過多は本病の発生を助長するので、肥培管理を適切に行う。
- (6) 治療効果のある薬剤は限られるため、発病前からの予防散布を徹底する。
- (7) 本圃に病原菌を持ち込まないように、育苗期の防除を徹底する。前年に本圃で発病した場合は、必ず土壌消毒を行う。

### 3. 防除上注意すべき事項

- (1) 育苗圃が多湿になると発病を助長するので、長時間の灌水は避ける。
- (2) DMI剤（EBI系）及びメトキシアクリレート（ストロビルリン）系、ベンズイミダゾール系薬剤は連用すると耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤とのローテーション（輪番）使用を心がける。
- (3) 防除薬剤は、大分県農林水産研究指導センター農業研究部病害虫チームホームページ内にある「大分県主要農作物病害虫及び雑草防除指導指針」（下記アドレス）を参照し、農薬使用基準（使用時期、使用回数等）を遵守する。なお、薬剤によっては指針の更新日以降に登録内容が変更されている場合があるため、薬剤のラベルに従って使用する。（ホームページアドレス <http://www.jpnpn.ne.jp/oita/>）